

今回は陥りやすい注意点のお話。サンフェイスの支援でもこれはほんとに気をつけています。気を許すと知らず知らずのうちにこのミスに陥りますからね。カード支援においても凄く気をつけてます。「大好きなモノをカードにして使ってるのに、全然選んでくれない」とかね。そもそも、そのカードを選んだらどうなるのか？ってことが解らないのに、選ぶ訳が無い。もっと言えばいつも飲んでるジュースと、カードの写真のジュースのパッケージが同じものと認識出来てるのか？ってところから始めないとダメですよ。iPadやVOCAなんかの支援機器が充実すればするほど、もっとアナログな支援を見直すべきだと思います。久田

第 63 回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

コミュニケーション機器があっても

VOCA などのコミュニケーション機器を導入する際には、どのようなことに注意しなければならないのでしょうか。

最も注意しておかなければならないことは、VOCA などのコミュニケーション機器を導入したら、子どもはコミュニケーションができるようになるという誤った考え方です。

「VOCA などのコミュニケーション機器を導入したのだが、それらを使わないのです。どうすればいいのでしょうか。」という質問を受けることがよくあります。これは、上記に示した誤った考えで、VOCA などを導入した場合に起こる問題だと考えられます。

コミュニケーション能力は、自分の意思が相手に伝わったという経験の繰り返しによって育っていくものです。ですから、VOCA 等のコミュニケーション機器を使うことができる環境が整ったとしても、それらをすぐに使いこなすことはできないということなのです。これからそれらを使って練習していくということです。

VOCA などのコミュニケーション機器が導入されて、それらを使っていいよという環境が整ったということだけのことです。これからそれを使おうとする人は、これまで、自分から相手にわかるように発信したり、受信したりといった、明確なやり取りを経験したことがないのです。つまり、コミュニケーターとしてはビギナーだということなのです。コミュニケーション機器を使いこなして伝えることはできないままの状態だということなのです。

今、目の前にある、手にしたばかりのコミュニケーション機器を使いながら、周囲にいる人との間でコミュニケーション成立の経験を繰り返すことが重要だということです。そして、コミュニケーション成立の経験を通して、コミュニケーションすることの楽しさ、面白さ、便利さに気付いていくようにするということです。この経験の場を如何に設定していくのか、これがコミュニケーション機器導入を考える際に大切なことを忘れてはなりません。

経験の場の設定は難しいように感じる方もいると思います。ところが、その人とどうやって楽しくコミュニケーションしようかと考えたとき、アイデアは浮かんでくるものです。教えなければならないと考えるより楽しもうと考えた方が、効果的なやりとりになりやすいと思います。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)
香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭、香川大学教育学部障害児教育コース准教授を経て、現在は国立大学法人香川大学教育学部教授。
1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。その軽快なしゃべり方、人柄からか、大阪では絶大な人気を誇る。
(著書)
暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など